

# 会 報

TUWVOB会 No. 49 2018. 12. 23

ホームページ <http://tuwvob.yamagomori.com/> (新しくなりました)

メールアドレスの変更は事務局(8期 佐藤)までご連絡ください。

OB会報は郵送を止め、原則としてTUWVOB会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は事務局までご連絡ください。 [taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp](mailto:taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp)



2018年10月13日(土) 「仙台サンプラザ」にて

手戸さん(7期)撮影

## 東北大学ワンダーフォーゲル部創立60周年記念祝賀会

### 現役、若手OB・OG、ベテランOB・OGの交流を求めて

2018年10月13日(土) 13:30~17:00 仙台サンプラザ

#### 第1部: 記念講演会

- 星 優平(4年生) TUWVの現状-佐藤先輩(8期)のロープワーク講習も含めて
- 星 征雄(33期) 近年の学生および社会人のヒマラヤ未踏峰登山の試み
- 平塚晶人(27期) 旧連からみた地図読みのスタンダード

#### 第2部: 祝賀会

現役から若手、ベテランまで同じテーブルを囲んで

#### 実行委員

委員長 櫻洋一郎(5期)

委員 菊谷清(7期)、真尾征雄(7期)、小笠原弘三(8期)、神山文範(12期)

顧問 小原佑一(4期)、佐藤拓哉(8期)、利根川敏(22期)

## 60周年記念行事を終えて

TUWV60周年記念事業実行委員会委員長 5期（昭和41年卒）櫻 洋一郎

TUWV60周年記念行事は平成30年10月13日懐かしき仙台の地で、来賓に鈴木ハツヨ先生をお招きし、歴代3部長にも出席いただき、144名のBO、OG、現役参加のもと盛大に開催されました。

TUWV OB、OG数は創部60年にして555名となりました。50周年が行われた2008年はリーマンショックに始まった長い間の不景気の始まりの年でした。それから10年、景気のせいだけではないでしょうが、入部者数も極端に少なく入部者ゼロの年も続きました。そして今、景気回復の兆しの中、今年は6名の新人を迎えて部員は10名。現役も久しぶりに賑やかです。

60周年事業をどんな集まりにするのか、が実行委員会の最初の議題でした。OB間では東京における恒例の新年会、仙台ではOB新人歓迎会がすでに定例化し、交流が続けられておりました。最近、ベテランOBと現役の間で沢登りのロープワークについての現場での指導、学習といった新たな交流が始まっています。

これをきっかけにもっともっと現役、若手OBとベテランOBの様々な交流が深まればいいね、今回の集まりがそのきっかけになったらいいね！を、コンセプトにしました。

第1部の講演会では現役の星優平前主将が部の活動状況を画像を交えて報告をしてくれました。続いて中堅の平塚晶人、星征雅の両氏のご自身の活躍の場での貴重な話をしてくれました。引き続き開かれた第2部の祝賀会で三人の講師と参加者との会話の中から新しい交流が始まったかもしれません。大いに楽しみです。

残念なことですが今回、36期から56期までの参加者はわずか3名でした。30代から40代は勤め先でも、家庭でも一番頼りにされる年代であり、やむを得ないことですが、そのような方々も参加したくなるようなOB会となったらと、念じています。

今回、現役の皆さんへは会費の中からささやかですが寄付をさせていただきました。備品の購入等、これからの活動に役立てていただけたら幸いです。

最後になりましたが、この記念式典を実現できましたのは、OB会事務局佐藤拓哉事務局長のOB会組織の管理、運営、そして、唯一の通信手段であるメールアドレスを永きにわたって管理してくれている利根川敏さんの努力の賜物でありますこと皆様にお知らせし、お礼を申し上げたいと思います。

70周年にお会い出来るか否かは神のみぞ知る。皆さんのご健勝を祈ります。



## 60周年記念行事に実行委員として参加して

TUWV60周年記念事業実行委員会 OB会員との連絡担当 7期（昭和43年卒）菊谷 清

一昨年（H29年）の新年会で、佐藤幹事長が60周年記念行事をやるかどうかを出席メンバーに諮ったところ「まあ、やってもいいんじゃないの」くらいの軽い雰囲気で行うことが決まり、さらにその流れで何となくその場の出席者の多い期から実行委員を出すことになって、7期からは私が実行委員に指名されました。50周年を盛大にやった後でもあり、周年行事の区切りとすれば60周年は中途半端という意識が会場の皆さんにあったように感じました。当の私も、東京で周辺のOBが集まって軽い記念行事をやればいいのかなあ、と簡単に考えていたのですが、1年後の第一回実行委員ミーティングで、予想外にも、仙台でできるだけ多くのOBを集めて開催しようという方針が決まりました。

行事の具体的な検討が始まり、私の担当はOB会員との連絡役と決まり、その内容は、

①OB/OG全員の現在のメールアドレスを確認して、最新のアドレス表を作成する。

②その後全員に60周年記念行事のご案内を一斉配信して、出席者を募る。

①についてはOB会の名簿担当が作成した詳細なメルアドのリストがあるので、それほど手間もかからないだろうと思っていましたが、2か月たっても4割の期と連絡をつけることができません。原因は色々あるでしょう。主にアドレスが変更になったためですが、加えて若い働き盛りのOBにとってこのような行事は優先度が低いことも大きな理由であったと思います。仕方ないので、確認メールの繰り返し発信、応答なしの期の前後OBに当該期の紹介依頼、そして最後は応答ないのは受信の証し、とかって決めて、4月中旬には430名の最新メルアド表をでっち上げました。

引き続いて、そのメルアドをもとに②の60周年記念行事のご案内を一斉配信し、行事の出欠を1ヶ月以内に回答してくれるよう頼みました。ところが1ヶ月後の回答率はわずかに33%。こんなに低い回答率では全体の出席者数を把握したことはならないということで、それから1ヶ月かけて再募集をかけました。一斉配信の募集では忙しい人に無視される傾向があるので、各期の代表者にその期をまとめてもらうよう依頼。代表者の方には各期のまとめで随分とお世話になり、最終的には回答率を73%まで引き上げ、出席者を約150名にもってゆくことができました。

定年退職してから13年。日頃パソコンをあまりいじらない穏やかな生活を過ごしていた私が、突然400名を超えるOB会員のメールの連絡作業を担当して、パソコンとにらめっこの日々を約半年間続けたわけですから、肩はこり、目はしょぼしょぼとなって、途中からハズキルーペのお世話にならざるを得なくなりました。しかし、記念式典に出席した皆さんには喜んでいただき、また現役の若者との楽しいふれ合いができたことを思うと、実行委員として苦勞してきた甲斐があったと思っています。



鳴沙山ラクダに乗って

## TUWV60周年記念祝賀会を振り返って

TUWV60周年記念事業実行委員会 祝賀会担当 7期(昭和43年卒)真尾 征雄

櫻 洋一郎実行委員長から、TUWV60周年記念行事の実行委員を仰せつかり、祝賀会の担当を命ぜられた。委員会で検討を重ね、多くの皆様の協力に支えられ成功裏に終わることができた。開催されるかもしれない70周年のために気づいた点を留めておきます。

### ① 会場について

秋の仙台は学会行事やイベントが多く、会場やホテルの確保を早くする必要があった。50周年祝賀会(参加者217人)の時から10年、高齢化が進んだうえ新入部員は減少。参加者は3割減の150人程度と予測していたが、200人でも対応できる仙台サンプラザクリスタルルームを祝賀会場とし、日時は10月13日(土)午後を1月に予約した。50周年の時も使った部屋であり、参加人数に合わせ部屋のレイアウトを変えれば対応は可能と判断した。日時と会場を早い段階で予約し、最後までそれが変わらなかったのが担当としては楽であった。最終的に参加者は144人で会場は丁度よい広さだった。

記念講演会は同じフロアの「宮城野」を借り、教室スタイルでスムーズに進んだ。

### ② 会場のテーブル配置と席指定について

今回のキャッチコピーは“現役、若手 OG/OB、ベテラン OG/OB の交流を求めて”であった。当初のテーブル配置は50周年同様前方に着席テーブルを配置し後方に立食テーブルを配置する案を提示したが、これでは前方に高齢者、後方に若手が集まり世代間交流ができないとのことでボツ。再々検討の結果、前方に2つ着席テーブル A,B(指定)を配置し、あとは立食テーブル(指定)を配置した。期がバラけるように席を指定した。ただ足が悪い方や高齢者が自由に座れるよう中央に着席テーブルを2つ



配置した。

立食テーブルに面識がない人たちが集い、初めはぎこちなかったが直ぐに打ち解けて会話が広がっていった。世代間の交流が進み良かったと思う。ただ反省点として開宴から乾杯までの間、足の不自由な方等を立ち続けさせてしまった。司会から足の不自由な方等はお座りくださいといってもらうようにすべきだった。

③ 次第について

50周年の時は、乾杯後数名の方にスピーチを頂いたが、その間私語が止まらず残念であった。今回は乾杯後のスピーチは一切入れなかった。中間に現役10人の簡潔な自己紹介を入れ、その後各テーブルに分散してもらい交流を促した。計画段階ではアトラクションに山の歌等の合唱や「くずらんこ」も考えたが一切やめ、交流に時間を割いてもらった。多くの方からいろいろな方と話ができ良かったといわれた。最後に一つの大きな輪になって部歌、学生歌を歌ったが一体感が出て良かった。

7期の手戸雅巳氏による全員の記念撮影と配布資料を、今回出席できなかった方にも配信したが、非常に好評であった。

④ 受付について

事前振込み制にしたので、受付時のトラブルや混雑がなくスムーズにいった。仙台サンプラザ会場への路上誘導員を二人現役から出してもらい、はじめての方でも間違わずに来場できた。

⑤ 料理とお酒

50周年の時は参加者数の75%の料理を出したら足りなくなり料理を追加した。今回も75%の料理を出したが少し残る程度でちょうど良かった。平均年齢が高くなったとともに、多くの方が話に夢中になったためでもあると思う。アルコールはビールよりも宮城の銘酒が人気があった。アルコールの量も50周年の時より減り、当初予算内で収まった。



横山さん（5期）によるエール



手戸さん（左 7期）、前田さん（右 8期）と共に

## 二大イベント報告

TUWV60周年記念事業実行委員会 会計担当 8期（昭和44年卒）小笠原 弘三

私のワンゲル（渡り鳥）の活動は、登山ではなく世界放浪（周遊）です。これまでに世界80余国を廻り、今年は2月に友人の学者と二人で21日間にわたってペルーとボリビア各地のカーニバルを取材、3月には妻とでベネルクス3国美術館めぐりでした。今年の旅はこれで打ち止めとして、4月からは二大イベントに取り組みました。

一つはもちろんTUWV60周年記念事業。もう一つは地元のシニアクラブ（老人会）の日帰り旅行です。私は副会長・旅行担当として、場所の選定・日程・案内・準備・集金・実行と一切を取り仕切ります。シニアクラブの会員は約250名、平均年齢は78才弱、皆さん足腰も弱って来ている一方、大概の所にはすでに訪れているので、企画の推進にはずいぶんと準備と手間がかかります。

TUWV周年事業は、櫻委員長の下で私は会計担当を仰せつかりました。500人を越えるOB/OG、どのようにして再登録名簿を作成して、皆さんに案内をお送りして参加を促して、会費を集めるのか…。

幸い、利根川さん(22期)が50周年での名簿を整理してくれていて、今回は菊谷さん(7期)がメールアドレスの再整備などを担ってくれました。おかげで、私の仕事はずいぶんスムーズにことを運ぶことができました。参加者の皆さんの応答もさすがにきちんとしていて、大助かりでした。残念ながら申し込み後用事でキャンセルが6名、当日欠席が2名、働き盛りの皆さんですのでやむを得ません。以下に収支報告を記載します。

【収入】	OB/OG参加費	127名* @10000	1,270,000 円
	同令夫人参加費	7名* @2000	14,000
	現役部員参加費	10名* @2000	20,000
	鈴木ハツヨ先生よりご祝儀		100,000
	50周年繰越金		112,000
	<b>合計</b>	<b>144名(鈴木先生を除く)</b>	<b>1,516,000 円</b>
【支出】	周年事業		1,304,355
	現役への贈呈		100,000
【残高】	(OB会会計に算入しました)		<b>111,645 円</b>

とても楽しく、よい周年事業になったと思います。特に、今回は現役部員が久々に10名となり、その活動内容の多彩さや諸君の態度には、とても感じ入りました。人と人との絆は、こうして60年の時空を超えても深めることができたのは大きな収穫です。

10月13日は周年事業。11月7日「北総の小江戸さわら」へのシニアクラブ旅行も62名の参加で好評をいただきました。私の今年の二大イベントは無事終わることができました。

トルクメニスタン／地獄の門にて



## 「歴史ある伝統は常に若し」— 創立60周年記念式典の最若手？実行委員として—

TUWV60周年記念事業実行委員会 講演会担当 12期(昭和48年卒) 神山 文範

昨年(2017)正月の恒例の新橋亭OB会で、出席者の大半を占めるシングル期の大先輩の皆様が60周年の祝賀会を東京でと発議された時、10-14期の末席から「東京ですらこのOB会と変わらない、するなら共通の思い出のある仙台か山ではないか」と申し上げたところ、その意は通じなかったようだが、実行委員の一人に指名されてしまった。

11月29日に開催された第1回の実行委員会を控えて、僕は9月に吾妻野地温泉で開催された4546の会(45、46年入部の皆さんが2年に一回温泉に集まり、近くの山を実力に応じていくつかのコースに別れて歩く会で、途中退部や前後入部の小生たちも希望者は入れる)に参加した際に、44の松井、45の岡部、46の今の諸氏と意見交換をした。そして、桜委員長に長いメールを送り、我々の意見として「東京近辺の初期のOBを主に対象にするなら東京でもいいが、遠くの人たちや若い人たちにも声をかけてそれなりの出席を確保するなら、全員の学生時代の思い出が詰まっている仙台でやる方がいいのではないか…」と提案しておいた。当日も仙台開催案を主張したところ、顧問として参加されていた4期の小原OB会長が賛同され、桜委員長は昼に仙台で開催し、夜は同期とか親しい仲間に任せる案で決断された。また、祝賀会



に先立ち、講演会か座談会をしたいとの意向を表明され、散会后すぐに50周年でも実行委員をされた在仙の真尾さんを実行委員に加えられた。

年が明けて1月8日の第2回実行委員会では、真尾さんも出席され、50周年と同じ仙台サンプラザで10月13日午後1時から4時をコアに開催すること、また小生が提案した(1)これを機に現役OB間の交流を深めるという趣旨、(2)現役と27期の平塚さん、33期の星さんなどによる講演会をすること、

(3)入部して活動実態がある人なら参加を認めること、他の骨子が固まった。その後、連絡担当の菊谷さん、会計の小笠原さん、在仙で式場手配や現役連絡の真尾さんと準備を進め、60周年記念式典を無事に終了できた。

その間に思ったことは、このような会がスムーズに進められたのは、新年OB会とOB会報の双方の永年幹事であり、また現役に対し自前でロープワーク訓練をされている拓哉先輩の尽力と人脈、50周年の実行委員でありOBOGのメルアドをしっかりと管理されてきた利根川さんの努力があったからということである。心から感謝申し上げたい。

振り返ってみて、最若手?の僕がしたことは、古参OBOGから現役1年の61期まで、また諸事情で途中退部した人も加えた、関係者全員が旧交を温めるとともに新たな交流を目指す記念式典にしたいという理念を明確にしたことだったと思う。司会をする中で現役の星前主将の講演に感謝し激励を込めて岡本太郎の「伝統は創造だ!」を紹介したが、学生歌にも「歴史ある伝統は常に若(あた)らし」とあるではないか。これこそ、今後の現役諸君が創り伝えて行くものだと思う。

式典前には仲間3人と船形山に登った。4年12月の快晴時以来、46年振り12回目の頂上は生憎風雨だったが、西行が再度平泉に向かう途次に小夜の中山で詠んだ歌を、同じ69歳だと、もじって「年たけてまた登るとは思いきや命なりけり陸奥の船形」と思った。

## TUWVの最近 (記念式典講演)

58期(4年生、前主将) 星 優平

子供のころファンタジーが好きでした。デルトラクエストやロードオブザリング、ハリーポッター、ネバーエンディングストーリー、崖の国物語…。たくさんの本を読みました。そして、いつかそんな胸がときめくような冒険がしたいと思っていました。しかし、中学校・高校と進学するにつれて部活や勉強に追われるようになりました。自分を取り巻く世界は広がり、当然のように関心は別の方面へと移っていきました。いつしか自然に対する興味や愛情は薄れ、冒険に対する憧れは過去のものとなりました。そんな中、大学に進学した僕はTUWVに出会いました。当時(2015年)の夏合宿のテーマだった西表島海岸サバイバルに惹かれたのだと思います。ここでの活動はまさに冒険でした。刻々と姿を変え続ける自然に挑むことは不確実で危険です。だからこそ出来得る限りの準備をしなければなりません。雄大で美しく厳しい自然。一人ではきっと越えられない障壁もパーティを組めば越えることができました。TUWVに入らなければ決してできなかった体験だと思います。

TUWVは今年で創部60周年を迎えました。これほど長く続くというのはとてもすごいことです。記念式典では多くのOB・OGの方々から現役時代のお話を伺い、この60年は続いた60年ではなく、繋いだ60年であることを実感しました。先代から続く伝統を守ることで大きな事故や事件を起こさなかったことはもちろん、自然を大切に、積極的に関わっていくというコンセプトは多くの人の理解を得て来たのだと思います。さらに、近年の部員数の減少を持ちこたえたことも大きかったと思います。一学年の部員数が1名という状況は多くあり、年度によっては0のこともありました。そういった中で大学院生や若い社会人OBのご協力を得つつ、何とか途絶えさせることなく60年の節目を迎えることができました。昨年からはOBの





佐藤拓哉さんにロープワーク講習会を開催していただき、安全なクライミング技術を勉強しています。現役生にはOBの方々と繋がりをこれからも大切にしていってほしいと思います。

最後に最近のTUWVの活動について簡単に紹介します。今の活動も昔と変わらず夏合宿を中心として行われています。4月には泉ヶ岳で新歓登山を企画し、ワンゲルの活動に興味を持つ新入生と交流を深めています。5月は訓練合宿です。面白山での新人訓練合宿と二口山塊での旧人錬成合宿を行っています。6月から7月にかけては夏合宿に向けたプレ山行を企画し、東北各地のフィールドに出向いています。夏合宿では約1週間の山行を行っています。最近では南アルプスでの縦走や北アルプスでの沢登り、沖縄の西表島での海岸歩きなどが実施されました。秋以降はフリー山行や次年度に向けた準備・トレーニングをしています。冬季山行は行っていませんが、ゲレンデでスキーやスノーボードを楽しむ部員もいます。直近の活動については、ホームページやTwitterで報告しておりますのでぜひご覧ください。

近年、若い人たちの間で登山やキャンプがブームになっているそうです。僕の周りにも「ワンゲルに興味あったんだよね」という学生が意外に多くいます（本当です）。こういった流れがTUWVを後押ししてくれることを期待します。頑張れ現役生。



西表島



大行沢

## 近年の学生および社会人によるヒマラヤ未踏峰登山の試み（記念式典講演）

33期（平成6年卒）星 征雅

新橋での新年会には「平成卒は会費半額」との誘い文句があるが、昨年に引き続いてこの恩恵を得たのは私のみであった。席上で、仙台で開催予定の60周年記念式典で講演するよう求められ、会費を負けてもらっているし、半年以上先の事だし、と軽い気持ちで引き受けてしまった。他にOBとして話をするのは27期の平塚晶人さんである。平塚さんはフリーライターとして著作もある有名人であるが、私は全くの若輩者である。たまたま日本山岳会の理事を引き受けている関係でご指名いただいた。自分のネタで話せることはないので、山岳会の知人たちがヒマラヤ遠征に行くのを見送りつつ感じてきたことを整理してみた。

ヒマラヤの標高が高いと言っても日本との緯度の違いが顕著であり、ヒマラヤの5000mは、やや乱暴なたとえだが、北アの3000m、東北の2000m、北海道の1000mに相当すると言える。現地の不便な国内移動と、高度順応するための日数分の休暇さえ確保できれば、ヒマラヤ遠征は技術的にも体力的にも決して夢物語ではなく、日頃の山登りの延長上にある



と感じている。お金はかかるが年齢的なハンデは大きくはない。それをお伝えしたかった。

会は大変盛況で、現役学生の活動報告も楽しく、若い世代の参加者は少なかったものの卒業以来の懐かしい方々にもお会いでき、楽しい時間を過ごさせていただいた。幸い、講演内容にも興味を持って聞いていただけた様子で、ほっとしている。

翌日は8期の佐藤さんの指導で、現役学生と丸森の岩場に行った。まだ山を始めて数年の学生たちの動きや思考の若さに触れ、自分も若い時はこんなだったのか、と、気づかされるが多々あった。

私の現役時代には、世代を超えたOBとの交流がなく、卒業後も前後数年のメンバーとしか交流を続けてこなかったが、新年会をきっかけにワングルの創立時の雰囲気を知り、学生歌を歌い、部歌を歌い、学んだことがどのような歴史の中で引き継がれてきたのかを知ることができたのは良い振り返りとなった。加えて、今回、記念式典という場で貴重な機会を与えていただいた。改めて実行委員の皆様へ感謝申し上げます。

### 旧連からみた地図読みのスタンダード（記念式典講演）

27期（昭和63年卒）平塚 晶人

30歳から45歳までの15年間、フリーランスとしてライター業に勤しんできました。この間、著作を10冊ほど世に出しましたが、そのうちの3冊は、山を歩く際の地形図の読み方に関するもので、そのベースはTUWVで培った地図読みの技術です。したがって、私は、TUWVに大恩があるわけで、これまでOB会に参加してこなかったことに、一抹の後ろめたさを感じてきました。

2年前、溜池山王の交差点で、1期先輩で26期の長谷川さんに邂逅したこと、先輩や同期と幾分のつながりが復活し、新橋での新年会にも出席するようになり、このたび60周年記念行事で、栄えある講演をさせていただくことになった次第です。

講演でも触れましたが、地図読みの技術は、GPSの発達により不要になったかのごとき風潮があります。しかし、そのようなことはまったくありません。われわれがTUWVで学んだ地図読みは、ある地点に到着して、それから地図を開いて、現在地はどこかと考えるようなものではありませんでした。先読みを効かせているために、現在地は常に分かっているのであって、それよりも重要なのは、予想した行程を基に山中での行動を律することでした。それがTUWVの地図読みでした。そのような機能は、GPSにはなく、人間の頭で考える必要があります。したがって、地図読みの意義や楽しさは、GPS全盛の今も、いささかも色褪せていない、と私は感じています。

さて、60周年記念行事ですが、やはり、肩を組んで、学生歌や部歌を叫ぶのはよいものです。久しぶりに会った1期下の後輩（28期）たちも、岩村の生え際が著しく後退していたり、樺元の柔髪が純白化していたりと、目を見張る変化に驚きはしましたが、10分も話せば時は一気に30年遡り、部室の匂いとバカ騒ぎが、憂いも恐れもなかったあの頃の精神とともに蘇りました。また、学生時代は面識のなかった鈴木ハツヨ先生とじっくりとお話しをすることができ、その気持ちの若々しさと思いやりの心に大いなる刺激を受けたことは、記念行事に参加した最大の収穫でした。

私は、46歳のときに早稲田大学の法科大学院に入学し、司法試験をどうにかクリアして、現在、弁護士となって4年目です。山は、社会人になってすぐに入会した東京の山岳会にそのまま所属して、年に数回という頻度ですが、沢に入って地図を読んでいます。TUWVとのつながりと地図読みの愉しみは、生涯続くことを、実感した60周年記念行事でした。





## ワングル5期同期会報告

5期（昭和41年卒）藤田 凱己

日時：10月13日～14日

場所：作並温泉 かたくりの宿

参加者：18名（大塚、谷、真山、佐藤、横山、吉田、朝倉、八木、築地、遠藤、桜、渋川、藤田、太田、大槻、相沢、庄子、横松）

前は岳温泉で同期会を行った。今年はまだ早いのでやる気はなかったが、桜さんが60周年の実行委員長なので同期としては行かねばならず、行けば何処かに宿泊することになるため開催することとした。

場所の選定にあたっては、3期の佐藤さんと6月末に同期の瀬尾さんを見舞いに行き、尚且つ津軽三味線みちのく大会に友人が参加するので、それを見ながら宿の偵察へ行くこととした。その日は岩松旅館に泊まり、翌日かたくりの宿で打ち合わせた。風呂は見なかったが、安いのでここに決めた。しかし後で苦勞することになる。

60周年終了後の移動には、電車が1時間に1本しかないため、ジャンボタクシーを予約し、それと藤田の車で行くこととした。したが、藤田は飲めなかったのが残念。他2名は直接現地へ。部屋割りを宿へ連絡しており、部屋の前に張り出すよう依頼しておいたが、何もしておらず、到着時に混乱した。宴会前に風呂へ入るが、また風呂がショボイ。偵察で見なかったのが間違い。料理はまずまずであった。

宴会時に各人の近況報告をやるはずであったが、小生が飲むのと写真撮影で忙しく、全く忘れてしまい申し訳ない。また、庄子さんには先生と瀬尾さんを自宅まで送っていただきありがとうございました。舘岡さん、谷さんより差し入れがあり、楽しく飲んだ。舘岡さんは60周年に参加していたが、同期会は不参加となり残念であった。次回は是非参加下さい。瀬尾さんもリハビリを頑張り早く元気になって下さい。

次回は2021年に遠刈田温泉で開催する計画なので、健康に気を付け元気に暮らして下さい。歳をとると次第に思い出の場所の仙台や蔵王に近くなる。



## 8・9期合同山行 第19回 古賀志山・那須岳－富川さん・川田さんを偲んで－

9期（昭和45年卒）原田博夫

一昨年は濱さん、昨年は水上さんを追悼しましたが、今回も、昨年11月と今年3月に亡くなられた9期の富川さんと川田さんを追悼することになりました。めざした山は、10年間ガンと闘病しながら昨年まで合同山行に参加してくれた富川さんが生まれ育った宇都宮郊外（鹿沼寄り）の古賀志山です。この山は彼の告別式の前に近辺を散策して、一番合うということで選びました。山行は9月2日・3日の2日間で実施しました。

〔参加者〕14人

8期 相原夫妻・前田夫妻・小笠原さん・中里さん・根岸さん・三原さん（8人）

9期 伊藤夫妻・富川夫人・石野さん・桃谷さん・原田（6人）

6月に川田さんに線香をあげに行った際、川田夫人はぜひ参加したいと言っていたが、急用が入り不参加に。

〔1日目（9月2日）〕

集合地へは、ほとんどが車で集合。仙台から来られる中里さん、荷物（カラアゲ他エッセン）の多い富川夫人は途中で車に乗ってもらい、宇都宮森林公園に隣接する宿泊予定の湖森館の駐車場に車を置く。近くの広場で各自持参の弁当で昼食。食後、1時より南コースを歩き始め、舗装された林道と階段状に整備された登山道を登り、3時頃に古賀志山山頂へ。帰路は同じ道で。宿泊する湖森館には4時頃到着し、各部屋へ。風呂で汗を流し、ビール等を飲みながら懇親会。6時からの夕食では2人に献杯し宴会へ。

その後部屋に戻り、写真や動画を見て、2人の話や昔話を酒の肴に各自持参した日本酒やビールで旧交を暖める。

〔2日目（9月3日）〕

8時過ぎに湖森館を出発。東北道を北上し、那須ロープウェイを使って山頂駅まで登る。牛ヶ首、峰ノ茶屋小屋を経て駐車場に戻る。その後「鹿の湯（41℃～48℃、6ヶの湯舟で有名）」で入浴し、3時頃解散。

〔2019年の予定〕

吾妻小屋に宿泊し、その近辺を散策の予定。誰かを追悼することなしに、楽しく歩きたいと思っている。



## 「樋の沢に集まれ」山行

21期（昭和57年卒）富士原 康浩

ワングル60周年記念行事の興奮も冷めやまぬ平成30年10月14日（日）、21期メンバーを中心に懐かしの二口「樋の沢」集中山行を行った。

前日の2次会・3次会の疲れもなんのその、秋保ビジターセンター近くの駐車場に車をデポし、各人の体力に応じて、健脚チーム（21期の千田・石井・坂本・鈴木宏昌、22期の石川）は大東岳経由で「樋の沢」へ、年相応チーム（21期の植木・大江・富士原）は、土屋教授（22期）に見送られて、沢沿いの道を「樋の沢」を目指して出発した。また、18期の笠原氏は単独で「樋の沢」を





目指し、面白山高原駅（旧面白山仮乗降場駅）を出発した。

年相応チームは、山を楽しむことに専念し、予定通り、「樋の沢」に到着。続いて、驚異的体力を誇る笠原氏が、予定通り南面白山を経て「樋の沢」に到着。健脚チームは、ほぼコースタイム通りで大東岳山頂に立ったものの、「樋の沢」への下りは日頃のトレーニングの成果が出ず、コースタイムの倍を要し、年相応チームと笠原氏の待つ「樋の沢」に下ってきて合流した。「樋の沢」のテンバには立派な小屋が立ったせいか、思いのほか狭く感じられたが、皆で、二次新でのつらくも楽しい思い出を語りあい、1年前に先に逝った櫻庭健年君（21期、理学部数学科卒）を偲んだ。

笠原氏は、小屋で1泊し、翌日笹谷峠まで縦走し、関山に下山。健脚&年相応チームは、一緒になって、夕暮れ迫る中、秋保ビジターセンターに無事到着。下山後、秋保温泉の「市太郎の湯」で汗を流し、帰途に就いた。

ワングル卒業以来、久々の二口は、紅葉が見ごろで、静かな山旅を楽しむことができた。

## 回顧・ワンダーフォーゲル部

3期（昭和39年卒）小俣 勝男

10月の半ば、東北大学ワンダーフォーゲル部創立60周年記念式典が仙台で行われた。自分は諸事情で出席出来なかったが、式典の実行委員から、参加者全員の集合写真（1ページ目の写真）と詳細な報告書が送られてきた。出席者は146名であり、OB数は545名の多数であった。写真の前列には10名の現役部員が座り、その後ろにOBがビッシリと並んでいた。自分の前後期にあたる先輩や後輩は、皆、後期高齢者である。出席者名簿を見ながら50余年の加齢変化を想像して姿を追いか求めたが、直ぐには判別できなかった。暫く、顔を見ていると記憶にある面影が浮かんで来て、懐かしさが心に溢れ、しばし、画面から眼を逸らすことが出来なかった。自分が入部したのは昭和35年であるから、爾来58年の歳月が過ぎ去ったことになる。歳をとり、遙か昔を振り返ることはできても、当時、20歳そこそこの若者の誰が、高齢期に至った自分の姿を想像できただろう。

自分が入学した昭和35年、東北大ワングルは部ではなく同好会にすぎなかった。それも設立僅か3年目であった。その年に先輩諸氏の努力により、運動部に部として昇格したが、活動方針も定かでない揺籃期のサークルであった。ワンダーフォーゲルとは渡り鳥を意味する。発祥地のドイツでは、野山を歩き、自然に親しみながら心身を鍛える運動であった。我が国では広い原野はなく、自然が多く残るのは山岳地帯であることから、山歩きが活動の主体となっていった。山岳部は険しい山に挑戦する意味合いが強いが、ワンダーフォーゲルは、山から山へと渡り歩くことが活動の主体であり、東北大ワンダーフォーゲル部でも、山々の尾根道を歩くことが多かった。幸い東北地方は、自然味豊かな連山に恵まれ、活動の場に不自由は無かった。



部活動は4月の新入生歓迎登山で始まった。仙台北西部にそびえる泉ヶ岳の山麓にテントを張り、山頂まで往復の後、夜はキャンプファイヤーで新入生を盛大に歓迎した。スタントと呼ばれる個人芸や団体芸が披露されたものだ。テント一張りは6人居住が基本だ。それぞれ、パーティーリーダーとサブリーダーが選出され、パーティー行動の全てをコントロールしていた。パーティー毎のスタントは、リーダーの腕の見せ所でもあった。5月の連休には強化訓練を主体にした合宿が行われた。当時でも、受験勉強



強は厳しく、難関を突破して入学した学生達の体力は、強健であるはずではなかった。放課後のランニングで基礎体力の回復に努め、強化合宿は、山歩きの体力を強化するものであった。二口峠の宮城県側に在る山形県営林署所有の無人小屋、伝蔵荘が合宿の活動拠点であった。ここから、大東岳や神室岳、蔵王連山の一角にある雁戸山等に脚を伸ばし、帰路は二口峠を越えて、仙山線山寺駅を目指すことを常とした。

夏合宿は、各パーティが独自のルートから入山して、定められた集合場所を目指して歩く集中登山の形式が多くとられた。自分が3年時の合宿は、奥只見の銀山平が集合場所であった。自分のパーティは谷川岳を群馬県側から入山し、奥只見目指して尾根道を踏破した。当時、谷川岳以北に尾根道が希薄な所が多く、地形図と磁石を便りに藪漕ぎ状態で歩いた記憶がある。この合宿では、1つのパーティが福島県の至仏岳山頂近くで落雷に見舞われ、1人の負傷者を出してしまった。河北新報でも、「東北大生落雷負傷」のタイトルで報道されている。それでも、負傷者を除き全員が集合地に辿り着いた。総員60名を超す人数であった。

秋合宿は、山歩きの楽しむ意味合いが強かった。この頃になると、新入生の体力は向上しているから、活動にゆとりが出てきていた。早池峰山、焼石岳、栗駒山、岩手山、秋田駒ヶ岳等々の東北の山々が活動拠点となった。合宿以外にも、何人かがパーティを組み、好みの山々を歩く個人山行は盛んであった。

自分たちが現役の時、名の知れた山々では、若い登山者で溢れていた。最近の登山者は、高齢者が多いと聞いている。遭難者は、圧倒的に高齢者だ。最近の若者は山に興味が無いのだろう。昭和36年、自分が2年生の時、多くの入部者が集まった。入会金500円也を支払ってだ。当時、中華店でのラーメンが60円の時代だ。学生にとって500円は大金であった。学生コンパの費用は300円から500円、一度1000円コンパをしてみたいとは夢の中の話だ。集めた入会金は、テント等装備品の購入資金となった。不足金は、学生ダンスパーティーを開催して集めた会費で補った。



式典報告書に各期の部員数一覧が添付されていた。第1期13名、2期14名、3期13名、4期19名、5期は何と28名であった。6、7、8期は20名以上の部員数を誇り、その後30期頃まで10名以上の部員数が続いていた。30期生は、昭和62年度の入学である。この頃までは、山歩きに興味を持つ若者が多かったのだろう。その後、部員数漸次減少傾向が続き、平成5年以降は更に減り続け、一学年1人か2人、時には0が続いていた。全学年で部員数3人から4人では、部消滅寸前である。最後に記載されていた、現役1年の61期生が6人とは頼もしい限りである。



組織の継続とは、人から人への繋がりである。人が途絶えれば組織は消滅の運命だ。自分やTG君の3期は、40名近い新入生が入部した。卒業時に残ったのは13人に過ぎない。内4人は鬼籍の人だ。「野に山にワンゲルへ、自然に親しむワンゲルへ」の誘い文句で入部しても、求める物には個人差がある。入部前のイメージが、実際の活動内容と異なれば、組織から去ることになる。30kg、40kgのザックを背負い、急な山道を黙々と歩く行為は楽では無い。遙か先に広がる山並みを心に描きながら、ただ脚を運び続けるだけ

だ。心から山が好きでなければ続けられない事だ。当時は、列車やバス等の交通機関を降りてから登山口まで1日近くをかけて歩いたものだ。これは、山道を歩くウォーミングアップに最適であった。これらのアルバイトに耐えられない者も退部していった。

山でのパーティは一種の運命共同体である。同じ飯盒の飯を食べ、同じテントでシュラフに包まって眠り、動けなくなった仲間の荷物を担ぎ、怪我をした仲間を背負い里まで下ろすこともある。夏合宿は通常2週間程度の団体行動となる。山での生活では、メンバー全員が事前に決められた役割分担により維持され、チームワークとリーダーの采配が全てを決めるのが合宿であった。これらの行為を年何回も繰り返すことは、仲間相互の関係を深め、事に繋がる。厳しい環境で寝食を繰り返せば、虚飾は剥がれ、それぞれ地の人間性が現れる事になる。山行で肝胆相照らし、親しくなった仲間同士の関係は、卒業後も継続することになる。現役当時は意識することは無いが、高齢期を迎えた時、当時を出発点とする繋がり、お互いにとって生涯の財産に転ずる。

創立60周年記念式典に参列した仲間や、参加できなかった仲間達を含め、各期、各期を繋ぐ仲間意識は、60年にわたる連帯の鎖で繋がっている様に思える。東北大学ワンダーフォーゲル部が続く限り、連帯の輪は更に大きくなっていくことだろう。人は誰でも一人では生きられない。学生時代、利害関係抜きに結びついた仲間同士の関係は貴重である。歳をとっても、短い言葉の遣り取りだけで、お互いに真意をくみ取れる関係は、ワンゲル同期の中でしか成立しない。

送られてきた集合写真に見る同時代を生きた仲間達の姿は、傍目には老人にしか見えない。50年以上昔、同じテントで寝食を共に18し、キャンプファイアーを囲み、学生歌「青葉萌ゆる このみちのく---」や、「そんなにおまえは なぜなげく---」と、部歌「放浪の歌」を共に歌った仲間達であることを想うと、年齢を超越して、当時の姿が蘇るから不思議である。一通のメールに添付された写真と報告書は、一番輝いていた時代の自分を、思い出す機会を与えてくれた。感謝あるのみだ。

## 現役時代からの夢 ヒマラヤの先達の足跡

4期（昭和40年卒）小原 佑一

ワンゲル創部60周年記念式典も盛会裏に終わり、反省会の連絡が来ました。実は反省会当日は既に予定してあった念願のヒマラヤ行きと重なってしまい、どちらを取るかといわれれば「山でしょう！」ということで、反省会は失礼して「現役時代からの夢 ヒマラヤの先達の足跡」に行ってきた。

現役時代から気になっていた中央アジアの探検。古くは玄奘三蔵、マルコポーロに始まる西域、S.ヘディン、A. スタイン、大谷探検隊などの探検記を読んで行ってみたくなった彷徨える湖「ロプノール」や楼蘭へ少しでも近づこうと、リタイヤしてからタクラマカン砂漠や米蘭、敦煌から北西のヤルダン国家地質公園の魔鬼城など訪れていた。

20世紀の初め、厳しい鎖国だったチベットに仏教の原典を求めてインド、ネパールから潜入した河口慧海師がチベットに抜ける間道を探っていた昔の塩の交易ルート、アンナプルナ山塊のダウラギリ(8167m)とニルギリ(6940m)に挟まれたカリ・ガンダキ川沿いのジョムソン街道に行ってきた。

ポカラからYeti Airlines(雪男航空?)の小型飛行機で、アンナプルナを間近に見ながらジョムソン空港へ飛んだ。河口慧海師も訪れたという、ヒンズー教と仏教の聖地と言うムクティナート(海拔3798m)に行った。空港から四輪駆動車で集落の入り口まで行き、そこからたった100mの登りだが高度順化なくいきなりなので、結構しんどい。でも、寺院からの谷を挟んでみるダウラギリの姿は大きくて輝い





ている。カリ・ガンダキ川の河原へ降りてみると、河口慧海師が登って行ったのではないかとと思われる対岸の谷が見える(写真1)。

泊まりは街道から少し離れた高台の小さな集落にあるこぎれいなロッジ、ダウラギリとニルギリに挟まれたロッジの屋上から夕日に染まるニルギリを眺め、真上を音もなく移動していく明るく輝く国際宇宙ステーション(ISS)を見た。山の中で見れたらどんなだろうと事前に飛行コースを調べておいて正解だった。夕食後、ガイドに連れられて近所の居酒屋(?)で、自家製の麦焼酎とヤクのジャーキーや素朴な現地の料理で盛り上がる。

翌朝、寒い中ジーンと我慢して見ていると頂から徐々に淡紅さを増していくダウラギリの姿は圧巻でした(写真2)。

ロッジから約100m下って河原に下り、カリ・ガンダキ川の支流をつり橋で渡って200m近い林の中の登り、ポッと出たところに池が!「ショコン湖(Sekong Lake) 海拔2725m」と標識が立っている。正面にはニルギリの姿が、水面には逆さニルギリが写っている(写真3)。このすばらしい景色を見ながら、ロッジで作ってもらった弁当をのんびり食べた。少し上の方へ登って行くと、高い樹は少なくなり、灌木の間に放牧されたヤクがあちらこちらでノウノウと草を食んでいる。高原の散歩気分を十分味わって別の道を河原まで下る。

今はバイクや四輪駆動の車がカリ・ガンダキ川の広い河原を、ほこりを舞い上げて通るので、昔の交易路、トレッキングルートとしての街道は地元の人が徒歩で行き来する程度。街道沿いに点在していた集落もひっそりとしている。河口慧海師が2ヶ月近く逗留していたというマルファ(Marpha)も、集落の中の通りは車も通らず静か。慧海師が逗留していた当時の村長アダム・ナリンの家の仏堂は、現在「河口慧海記念館」として当時のまま残されていた。

街道の石畳みに沿った二階家の二階部分の二部屋、控の間で寝起きし、隣接する仏間にぎっしりと保管されているチベット語の経典を毎日読み続け、午後は食事を一切取らず、就寝前には座禅という生活。窓から見える近所の草花やカリ・ガンダキ川、そしてその先にそびえる白いニルギリの峰々を眺めては心を休めていたようである。

今まで慧海師の「チベット旅行記」などでは、越境ルートや関わった人たちを隠すため詳しいことが書かれておらず、謎とされていた国境越えの部分に関する慧海師の日記が2004年に公表された。解説を交えた文庫本(河口慧海 奥山直司編「河口慧海日記」講談社学術文庫)が出版された。ルートなどもほぼ解明されたので、この旅行の前に予習をすることができた。しかし、最新のGoogle Map/Earthでルートを確認しようとしても集落名も地名の記載のほとんどない、丸っきりの空白地帯であった。帰国後、「河口慧海の足跡をたどって かつての王国ムスタンとドルポ」という雲南懇話会(中国の雲南・チベット地域に興味・関心を持つ人達の集まり)で行なわれた稲葉香氏の現地調査/踏破の講演資料をインターネットで見つけた。

今回の旅行で役に立ったスマホのアプリは

- 山に向かってスマホをかざすだけでピークの名前や高さを表示してくれる「Peak.Finder」
- どこにいても(スマホの圏外でも)地図や現在位置を表示してくれる「Maps.me」
- 移動したコースの位置や時間をGPSデータで記録してくれる「Geographica」

これらのアプリは必要な情報をキャッシュ(事前にスマホ内に保存)しておくので、スマホの圏外でも使用することができる。





## 残雪の天城山登山

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

2018年3月27日に、快晴の下、鎌倉の自宅を5時30分に出発した。相模湾沿いの国道134号線、西湘バイパスから国道135号線を経由して、伊東駅入口より天城山脈に向かった。天城高原カントリークラブの登山者用駐車場には8時に到着した。途中、遠笠山林道脇には積雪があったり、鹿が道路を横断したりしていた。駐車場の綺麗な手洗いの壁に、「登山届はQRコードできるように」と書いてあった。紙の時代は終わったようだ。

バロメーターを国土地理院の地形図の1,050mに合わせ、寒い中をいざ出発とした8時25分（快晴）。四辻一万二郎岳には9時47分、足元は、斜長石斑晶の見える灰色安山岩。万二郎岳登9時52分、馬の背、アセビのトンネル入口、石楠立（はなだて）、万三郎岳には11時12分に到着した。地形図標高1,405mに対しバロメーターは1,415mを示していた。登りの標準時間2時間30分に対し、2時間47分であった。万三郎岳も万二郎岳も景色が良いとは言えなかった。万三郎岳から万二郎岳への尾根筋は、3月21日の大雪の名残か、残雪が多かった。

万三郎岳を11時30分に出発、右内股の筋肉が攣ったのでサロメチールを塗った。万二郎岳に12時40分、四辻、駐車場には13時55分に戻った（薄曇り）。下りの標準時間2時間に対し、2時間25分であった。この寒い中、総勢22名の方々が登山を楽しんでいた。融雪でズボンの裾が泥まみれとなり履きかえて、結構きれいな駐車場の手洗いを済ませ出発した。松崎町の長八美術館、沼津の御用邸で雛飾りを見学して帰宅した。



## 飛騨尾根を登攀してジャンダルムへ

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

今年の夏は異常な猛暑が続いた。黒部の巨人、丸山東壁を登る計画を立てたが、あまりの暑さに、標高の高い涼しいところへ行こうということになり、8月4～6日に鈴鹿のクライミング仲間3人と、新穂高温泉－西穂－飛騨尾根（登攀）－ジャンダルム－奥穂－白出沢－新穂高温泉と周回することにした。約18年ぶりの縦走である。

初日はロープウェイで西穂山荘までの楽な登りである。実質的には中日だけがハードである。翌朝3時に小屋を出た。1時間余りの登りで独標に着くと、ガスが晴れ始め稜線が見えてきた。ピラミッドピークから岩稜が続き、小ピークをいくつも越えていく。2時間40分で西穂高岳に到着した。展望を楽しんでいると順に登ってくる登山者で狭い山頂が賑やかになってきた。半数は奥穂へ縦走するようだ。縦走路は、ミヤマアキノキリンソウ、イワギキョウ、チシマギキョウ、トウヤクリンドウ、イワツメクサなどが咲いていた。

間ノ岳、天狗の頭と順調に越えてきた。天狗のコルコブの頭までの登り返しに時間がかかり、体力のなさを実感した。10時20分、コブの頭にやっと到着した。登攀に不要なものをデポし、ガラガラと崩れるαルンゼを、飛騨尾根に向かって降りた。途中、30mの懸垂下降をし、T3の基部ヘトラバース気味に下降した。

T3からジャンダルムに向かい、ほとんど稜線に沿って登攀した。所々に古いケンが残置されており、カムがなくても登ることができるが、念のため要所ではカムも使った。青空に向かっての登攀は快適そのものである。傾斜はきつくなく、スタンや、ホールドは豊富なので、持ってきたクライミングシューズは使わず、アプローチシューズで登った。数ピッチの登攀でジャンダルムのてっぺんに立った。16時過ぎに奥穂高岳に到着した。時間が遅いのもう誰もいなかった。

最終日は奥穂小屋の裏から急峻でガレ場続きの白出沢を一気に下った。下るにつれて気温が上がり、暑くなった。それよりも、18年ぶりの長い下りに脚がすっかり悲鳴をあげてしまった。



飛騨尾根の登攀  
奥穂からジャンダルム（右が飛騨尾根）

飛騨尾根からジャンダルム  
笠ヶ岳に沈む夕日

## 現役ヘローワーク講習～丹沢・広沢寺の岩場と丸森の岩場

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

昨年の作並・鎌倉山での講習会に続いて、3月に丹沢・広沢寺の岩場で、10月に60周年記念行事で仙台に行ったついでに、翌日に丸森の岩場でロープワーク講習会を行った。以下は、私のクライミング日誌からの抜粋である。

【広沢寺・弁天岩 3月17日（土）、18日（日）晴れ】

TUWV現役3人を対象にロープワーク講習を行った。参加者は、北村大河（2年）、高山彰吾（2年）、廣川暉人（1年）と会社のみどりちゃん、本間学である。



初日

- ロープの結び方（8の字、マスト、半マスト、マッシャー、フレンチ）
- 終了点（ビレイ支点、懸垂支点）の作り方、ランニングビレイの取り方
- リードのビレイ、セカンドのビレイ
- 懸垂下降（立木に直掛け）、懸垂下降時の仮固定と登り返し

二日目

- リードのビレイ、セカンドのビレイ
- 懸垂下降（通常の懸垂下降とセキュリ付きの懸垂下降、二人同時に懸垂下降
- 懸垂下降時の仮固定、登り返し
- セカンドで登っている時に負傷した者の1/3引き上げとカウンターラッペルによる下降
- チロリアンブリッジ

最後に縁ちゃんー北村くんペア（岩壁右端→迂回路）と高山くんー廣川くんペア（迂回路）に分かれて2ピッチで岩壁の上端まで登り、全員で45mの懸垂下降をして締めくくった。



【丸森の岩場 10月14日（日）曇り】

ワングル60周年記念行事で仙台に行ったついでに、丸森にある岩場で現役に紹オープンワーク講習を行った。参加者は3年生2人、2年生1人、1年生4人（1人欠席、1人寝坊）。33期の星さんが手伝ってくれたので、非常に助かった。

7時に角田駅に集合し、第2登山口から登った。15分程で稜線に出て、そこから10分弱で岩場に着いた。講習内容は春の広沢寺と同様である。初めて受講する1年生がいるので、どうしても最初からの講習になってしまう。最後に簡単な岩場を現役が2パーティに分かれて登り、反対側の垂直の岩場を懸垂下降した。初めての1年生にとっては、恐怖の、それでも楽しい経験だったようである。





## エチオピア・ポルトガル旅行記

10期（昭和46年卒）田中 康則

今年の登山は高尾山へ1回のみです。7月の連休は10期の飲み会、9月の連休は高校の同窓会と続き、登山は出来ませんでした。最近は年2回海外旅行をしています。今年はその旅行記です。

正月はエチオピアへ。ダナキル砂漠とエルタ・アレ火山が目的です。砂漠ではラクダのキャラバンなど。火山では幸運にも噴火を見ることが出来ました。アディスアベバから成田へ15時間。近場を除けばこれが最後のエコノミークラスでの旅行かも！長すぎる。



ダロール火山の噴火口



エルタ・アレ火山の噴火

8月はポルトガルへ。もちろんビジネスクラス利用です。リスボンからコインブラ、ポルトへ。再びリスボン。最後はロカ岬。ポルトガルは料理もビール、ワインも美味しい国でした。今年の正月はビジネスクラスで行くエジプト旅行を予定しています。



ポルト市内、ここで2泊



欧州の西端 ロカ岬

## ネパールへの旅

22期（昭和58年卒）利根川 敏

TUWVが60周年をむかえる2018年（1月）にネパールを訪問しました。今回の旅は、カトマンズ近郊のナガルコットとポカラ（カトマンズから飛行機で30分）の2か所に滞在しましたが、特にポカラ郊外にあるフォクシン地区から見たダウラギリ山系の眺めを中心に報告します。

ポカラ市内のホテルから朝3時ころ車を出発し、真っ暗な山道を90分ほど走り、小高い山の上にある小学校で休憩、チャイ（ミルクティー）を飲みながら日の出を待ちます。ライトが無くても歩けるタイミングに出発し、農家の庭先を抜け広場に到着、ダウラギリの白い山肌が日の出とともに赤く染まる様子を眺めながら、8000m級の山々の景色を堪能しました。

掲載したパノラマ写真は左から、アンナプルナ・サウス（7219m）、アンナプルナI（8091m）、マチャプチャレ（6993m）、アンナプルナIII、IV、II（7555m、7525m、7937m）、ラムジュン・ヒマール（6986m）です。レンズを望遠に切り替え撮影したものが、順にアンナプルナ・サウスとアンナプルナI、マチャプチャレとアンナプルナIII、アンナプルナIV、IIとラムジュン・ヒマールです。また、写真の左奥（西側）にはダウラギリ（8167m）もうっすらと確認することができました。

ネパールには、毎日この絶景を見ながら生活している農家の方々もいる訳で、便利な都会の生活が本当に幸せなのか... 何やら不思議な気持ちになります。

帰国便は、カトマンズから中国の成都を経由しました。このフライトはエベレストの東側を飛ぶため、望遠レンズを準備しスタンバイ、離陸から約30分過ぎに肉眼でエベレストを確認することができました。1人旅のネパール訪問でしたが、気候が安定している1月を選んだこともあり、期待通りの山々を見ることができました。



アンナプルナをバックに



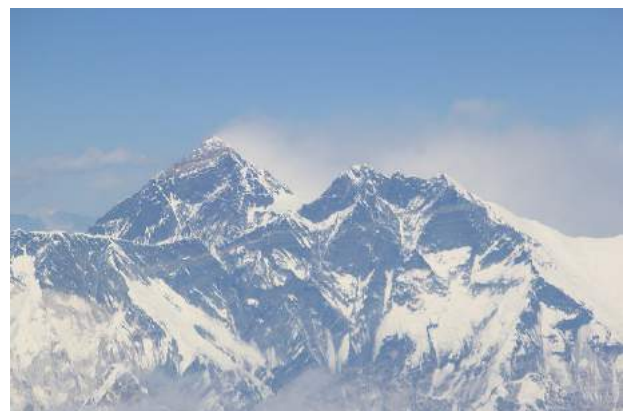
アンナプルナ・サウスとアンナプルナI



マチャプチャレとアンナプルナIII



アンナプルナIV、IIとラムジュン・ヒマール



飛行機から見たエベレスト



### 訃報

平成 29年 5月 1日、6期の木村勝弘さんがご逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

### 訃報

平成 29年 12月 3日、21期の櫻庭健年さんがご逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

### 訃報

平成 30年 3月24日、9期の川田実さんがご逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。



1968年

### 懐かしき二口小屋の変遷

(12ページの小屋は1960年代初め)  
周りの木は大きくなっても小屋はそのまま。  
今は、樋の沢に立派な小屋があり、磐司  
小屋はもうない。



2005年



2005年



## 新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2019年1月25日(金) 18:00 (会費は8,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: [taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp](mailto:taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp)

### <2018年新年会出席者>

(S39)岡好宗、後藤龍男 (S40)小原佑一、島崎質  
(S41)相沢宏保、海老央一、大田光二、門屋大二、  
桜洋一郎、佐藤豊治、渋川尚武、瀬尾勝之、谷正美、  
八木真介、横山雄一郎、横松 (S42)青木祐二  
(S43)石川誠之、大木芳正、大釜寛修、金子清敏、  
菊谷清、高橋直樹、藤森英和、真尾征夫朗、  
(S44)小笠原弘三、佐藤拓哉、前田吉彦、三原健二  
(S45)石野好昭、伊藤健一、原田博夫、桃谷尚安  
(S46)田中康則、若佐則雄 (S47)池田重則、園部式正  
(S48)神山文範 (S49)岡部安水 (S62)伊田浩之  
(S62)平塚晶人 (H6)星征雄

以上42名



### TUWVOB会 2017年会計報告 (東京口座)

1. 収入	
前回繰越	344,734
利息	2
計	344,736
2. 支出	
次回繰越	344,736
計	344,736

新年会において、「若い人の参加を促すために会費をタダにし、あるいは半額にし」という意見が出されました。昔、会費を集めていた頃、大半は新年会に参加した方から徴収していました。このような背景を考慮の上、平成に卒業した方に対しては半額をOB会の会費から補助することにしています。ご理解のほどお願いします。

### ★★事務局より★★

- ◇ OB会報47号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワングルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。これまでメールアドレスが分からない方には郵送してきましたが、原則として郵送は終了しました。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622